身体―宇宙の対応の宗教現象学的構造

―宇宙創造神話における原初的存在の巨人イメージと成長のモティーフについて―

久保田　将之

はじめに

本論は宗教（現象）学のパースペクティブにたって、ミクロコスモス（身体）とマクロコスモス（宇宙）の対応に関する従来の取り組み、とりわけエリアーデの取り組みに注目し、さらに新しい構造的トピックとして対応における大きさの問題を今後の研究のため提示したい。原初巨人の身体性、及び成長する身体に含意された世界観という二つのトピックから考察するものである。[1]

そして古代のみならず現代においても、宇宙創造神話における宇宙と対応の問題は、歴史的な状況と取り組むアルカイックな（根源的な）宗教性を保ち、宗教的な世界観を提示するものであることを明らかにしたい。

第一章、エリアーデにおけるミクロコスモスとマクロコスモスの対応の研究

宗教体験の理解に関して、次に宗教体験における対応を、さらに象徴としての対応の問題を扱う。

第一章、第一節、宗教体験の理解

この論文における筆者の立場は宗教学者ミルチア・エリアーデにならって、宗教（現象）学の立場である。エリアーデは「聖なるものの顕れ」をあらわす語としてのヒエロファニー（heirophany）という語を根幹に、それを理解する学問が宗教学であるという最小限の定位から出発する。「人間が聖なるものを知るのは、それが自ら顕われるものであり、同時に俗なるものとは全く違った何かであるとわかるからである。この聖なるものの顕現を、ここではヒエロファニーという語で呼ぼう。この語の利点は、その語源が含意する以上のもの、すなわち何か聖なるものが我々に対して現れるということ以上の意味を全く持たないところにある。およそ宗教の歴史は、最も原始的なものから高度に展開したものまで、数多くのヒエロファニー、つまり聖なる実在の顕現によって成り立っているものといえる。[2]」聖なるものは俗なるものとまったく異なるものである。しかし、聖なるものは俗なるものを通してのみ顕現されるので

ある。石や木という俗なるものの中から聖なるものが顕われるとき、俗なるものはそのままのかたちでヒエロファニーとなるという。この場合の「そのまま」とは、石や木がヒエロファニーとして現れない人々にとって、つまり宗教体験をしない者にとって、「そのまま」で止まっているにすぎない、という外面的な意味よりも、むしろその体験者の体験の内面における聖と俗という二つの存在様態の状況を映し出す表現である。その体験において、聖なるものの顕れによってすべての価値が置かれるという世界把握は、そうではないそれ以前の世界把握が宗教体験によって止揚されることで生起するという弁証法的な関係を構造的に示すものである。「俗とはヒエロファニーの弁証法によって聖へと変わるものであり、「どんなヒエロファニーでも、最も根本的なヒエロファニーですら、パラドクスを示すということはいくら強調しても尽くせない。聖なるものを啓示することによって、どんなものでも『何か違うもの』になるが、しかし、それは同時に『そのまま』のものであり続けるのだ。というのも、それはそれを囲い込む宇宙的世界に参与しているからである。聖なる石といえども石であることにかわりない、つまり、表面的には、（もっと正確に言えば、俗なる視点から見れば）特定の石を他の石から区別するものは全くない。しかし、石がそれ自身聖なるものとして啓示される人々にとっては、すぐそこにある存在が超自然的な存在に変質する。言いかえれば、宗教的体験をもつ人にとって、全自然が宇宙的神聖性として開示されることもまれにありうるのである。宇宙はそれ全体でヒエロファニーになることができる。[3]」そしてそのヒエロファニーの体験は、神学者ルドルフ・オットーの言う「ヌミノーゼ」のもつ二つの側面、すなわち「恵みであるとともに危険」、あるいは「魅了するとともに畏怖させる[4]」といった二つの側面を合わせ持つ体験である。このようにお互いに相反、矛盾する性格を一つの宗教体験の中に同時に備える表現は、全体的でかつ緊張を伴った体験から導かれたと言うことが出来よう。以上のように宗教を宗教固有の地平において研究しようとする宗教学の立場はこの聖なるものの体験を根本に置き、そこから発している。その宗教史の全体像の研究の方法を聖なるものの顕れという体験、最小限の定位から始め、導こうとする。

第一章、第二節、宗教体験における身体と宇宙の対応

そして、「対応」の問題はエリアーデにとって、「永遠回帰」「祖型と反復」といった最重要の術語同様に根本的な問題であり、上記で示したヒエロファニー論を前提にした、エリアーデの象徴論・アルカイックな存在論の提示は同時に対応論の提示であるといって過言はないだろう。

エリアーデは宇宙と人間とが同一視されるという現象には、宇宙の中に聖性を認めると同時に、自らの中に宇宙を見つけ、そして聖性を発見するという体験を前提としているという。「宗教的人間にとって宇宙（cosmos）は『生きて』『話す』何者かである。世界が生きているということは、それ自体、その聖性の一つの証拠である。なぜなら宇宙は神々によって創られ、神々は人間に対して宇宙的生命を通してその身をあらわすからである。…人間は自らを小宇宙（microcosm）とみなしている。人間は神の創造の一部を成す。

言い換えれば、人間が宇宙の中に認める聖性を、人間は自分自身のうちに再発見している。その結果、人間はその生命を宇宙の生命に相同なものとして定立する。すなわち宇宙的生命は神の創造物として人間存在の模範となるのである。[5]」

そして「我々はこれらすべての相同関係を単なる思想ではなく、体験としてもっていた人間の実存状況の一つとして理解しよう」と宗教（現象）学の態度を明確に主張する。こういった主張は思想同様に行為を対象にすべきであること、言い換えれば神話と儀礼（行為）全般としての全体的知を対象にすべきであることを主張する方法論的な内容をもつ。その際に彼がとった方法として注目すべき点は、祖型と反復という宗教的構造と関わらせ、宗教的な人間の諸々の行為を宇宙創造の反復的営為としての性質をもつものとして示す点である。対応を宇宙創造論との関係で解釈し、神話・儀礼における対応（相同）化を広く問題にする。

それゆえ、頭は天、心臓は太陽、髪の毛は木々と言った解剖学的な対応（相同）構造のみを取り出し、扱うのではない。対応の構造をさらに大きな範疇から考察している。エリアーデによると、例えば古代中国における個々人の結婚という行為は天と地の結婚、すなわちヒエロス・ガモスの再現としての意味をもつという。エリアーデは結婚という行為における、人間の行為と宇宙の行為との間の時間的な流れにおける対応と、夫（＝天）と妻（＝大地）という空間的な対応との時間・空間の両面から追っているのである。解剖学的な対応もその原因としての宇宙創造神話との関わりで、ヒエロス・ガモスのように時間・空間の両面にわたる対応として、理解する。

第一章、第三節、象徴としての身体と宇宙の対応の問題

このような対応は時間・空間のそれぞれの面で多岐にわたり、そこで、エリアーデの言う象徴の多価性、連関作用が問題になってくるのである。彼は、「宗教的象徴の本質的な性格は、その多価性にあり、その連関が直接的な日常段階では不明瞭な多くの意味を、同時に表現する能力にある[6]」として、月のシンボリズム（象徴作用）を具体例として提示する。月の象徴作用は、月の満ち欠けの周期性、束の間の転成、水、植物の生長、女性的要素、死と再生、人の運命、機織りなどの間の連関を同時に示すものであり、これは月のシンボリズムだけではなく、水、石、といった様々な事象のシンボリズムに共通した性格（多価性、連関作用）である。そのため、これらの象徴の性格によって、宗教的象徴は、世界を繋げ、一つのまとまりある全体（コスモス）として人間に理解させる。言い換えれば、「象徴は、異質的な種々の存在を一つの全体の中に表現し、また一個の『体系』の中に統合することすらできる視点を明らかにすることができる[7]」（p.100）のだ。この「体系」は、人間がいかに宇宙と関わってきたかを示す。象徴によって宇宙と人間との関わり、人間の実存的な状況を表しているのである。（pp. 100-102）

以上、エリアーデの宗教象徴論は同時に人間と宇宙の対応論に結びつく。さらに、この対応論は彼の他の著作において、大きく二つの問題、宇宙創造神話とイニシエーションの問題に帰結していく。宗教体験における対応の生起・反復に焦点をあて、それぞれ（神話的祖型としての）対応の生起としての対応（相同）化、あるいは儀

礼的反復における対応化として問題を扱っている。[8]

エリアーデが構造の提示の中で、創造神話と対応の問題を結びつけた点は、宗教学者ブルース・リンカーンらによって継承され、さらなる詳細研究がなされてきた。これらは高い評価を受けている。[9]

そこでそれらをふまえつつ、創造神話にしばしば現れる巨人イメージに注目したい。対応の問題を扱う際に表れる原初的イメージの一つであり、大きさというトピックを対応の問題の中で考察するのにまずふさわしいものであると考えるからだ。次に、現代における創造神話における対応を考えてみたい。これはエリアーデが古代の文献の世界から基本的に論を進めることもあり、資料的な補足を行うためである。同時に、エリアーデの展開するアルカイック（根源的な）な象徴的世界が必ずしもプレモダンに限定されるものではなく、人間にとって普遍的な世界観であることを示すことが出来るものとして提示したいと考える。

第二章、宇宙創造神話における原初巨人の巨人イメージ、原初巨人の身体における対応[10]

神学者ルドルフ・オットーは『聖なるもの』において、[11]聖なるものの体験におけるヌミノーゼの感情から宗教体験の諸相を理解した。彼のヌミノーゼの現象学的理解は、このヌミノーゼの感情の分類によってなされる。その第五のヌミノーゼの要素として「巨怪なるもの（deinós, das Ungeheure）」がとりあげられる。まず、この巨怪のヌミノーゼは、ただ単に、広がりと性質について、非常に大きなことだけであるというのではなく、「秘義」「戦慄すべき」「尊厳なる」「荘厳なる」「力ある」の諸要素を含めたヌミノーゼの体験といえるものであり、次に、「人間の空間的把握力を超越しているほどの大きさのもの」（七六頁）であり、同時に「まったく予期しないもの、見知らぬ他者としての『驚異（stupendum, oder mirum）』」（七七頁）であるという。

このオットーの分析は、「巨怪なるもの」の感情が様々な巨大さの表現、例えば巨人のイメージの源であると考えさせる点で興味深い。

さらに、中世、ルネッサンス期の民衆文化の研究者であるミハイル・バフチーンは、具体的に対応と大きさ（巨人など）の問題を結びつけ、「グロテスク（なもの）」という言葉から、宇宙的で多義的な性格をもつ身体のあり方を示している。[12]彼によれば、従来のラブレー研究には解釈学的な欠点があるという。それはラブレーの作品に登場するグロテスクな人物たちのイメージを単純に風刺的、一義的、否定的にのみしか理解していない点、すなわち「グロテスク的風刺の本性が何か否定的な、あってはならぬものの誇張」と結論づける点であるという。（二七二頁）バフチーンは、「誇張における喜ばしき過剰感の出てくる根源」、すなわち世界、人類を「改新」「完成」させようとする宇宙的、宇宙創造的な肯定的力（二七六頁、二七九―三二二頁）として現れている物質的、賑体的イメージこそ「グロテスクなもの」の本質であると主張する。そしてグロテスクなもののイメージの一つである「巨人・大男」も同様に理解する。程度の差はあるにしても、「宇宙の骨賑そのもの」として「宇宙と同じ自然の営みと力」（三〇〇頁）をもつ賑体を有する「巨人たちは物質的、賑体的豊富、余剰についての民衆の観念と密

接に結びついて」（三〇三頁）いると述べる。さらにバフチーンは、ミクロコスモスとマクロコスモスの対応を、豊富な事例を用いて示している。

このバフチーンの研究で注目すべき点は、二点ある。その一つは宇宙創造的な存在としての巨人とその大きさというイメージを様々な具体的描写の中から、検証している点である。大きく空けた口、歯、喉、鼻、分断された賍体、星まで届く長い歯、太った体、大食い、脱糞ほかである。そして第二の点は、ラブレーの世界に登場する彼ら巨人の思想的源流を追っている点である。その源流は一般に「原初巨人」と呼ばれるものであるという。人類の宗教史上、広範に見られるであろう神話的人物（例えば、中国における盤古、メソポタミアにおけるティアマト、北欧におけるユミルなど）である。それら原初巨人において、ラブレーの世界に登場する巨人や大男のイメージの源流として、一層、その宇宙創造的なイメージは顕著に現れているとバフチーンは述べる。

一方、宗教学者のブルース・リンカーンは『神話、コスモス、社会』の中で、インド・ヨーロッパ語族の神話・儀礼における原初巨人と人間、宇宙の関係を一つの宇宙論として分析している。永遠回帰の宇宙創造論的な対応、対応化がコスモロジーを構成してているというのである。[13] インド・ヨーロッパ語族の宇宙（もしくは社会、人間）創造神話の中に登場する原初巨人とは、多くは殺害されることによって、その身体が宇宙に変容していくという存在である。例えば、『エッダ』では、神オージンが巨人ユミルを殺し、その死体から世界を造り上げる様を次のように歌う。

ユミルの賍から、大地は造られ、
そして彼の汗から、海が造られた。
山が彼の骨から、木々が髪の毛から、
そして天が頭蓋骨から造られた。
眉毛から、優れた神々たちは、
人々の子々孫々のためのミドガルドを造り、
そして脳から神々はすべての雲々を形作る、あの気むずかしい雲を。

（「グリームニルの歌」、第四〇―四一節）[14]

このような神話の構造は、原初巨人から世界が生まれる様を描くものであるという。ここには身体から世界が誕生し、身体-宇宙の対応が生まれる様子（対応が生起するという意味で対応化）が描かれている。

また逆に、世界から人間のかたちをした巨大な存在が生まれる様を描く人間創造神話もある。一四世紀に書かれた、人間創成の記述は表面的にはキリスト教の影響を見せるものの、その内容の大部分はキリスト教以前の神話的世界に由来するものと考えられている。

神は八つの変化により、
最初の人間、アダムを造りたもうた。
八つの変化とは、石から骨、大地から肉体、水から血、風から心、雲から思考、
水滴から汗、草々から髪の毛のふさ、
太陽から両目に、変化することである。

（エムシッヒ稿本）

この神話も対応化を語るものである。しかし、先の神話とは反対の方向性をもち、人間から世界に至る対応化が述べられていると言えよう。

この二つの事例のみならず、インド・ヨーロッパ語族における創成神話は宇宙創造神話と人間創造神話を基盤とするという。一つに「原初の存在が殺害され、手足が分断され、そこからコスモスが、もしくはそのいくつかの重要な側面が創造されるのである」という普遍的な構造をもつ宇宙創造神話がある。二つに、それとは反対方向の、世界の各部位から人間が生まれるという人間創造神話がある。これら両方の対応化が組合わさって、永遠のサイクルとなり繰り返されるという宇宙論を構成するものであるという。つまり、人間が死に（姿を変え）、世界が生まれる。そして世界が死に（姿を変え）、人間が生まれる。さらに続けて、その人間が死に世界の一部となる…ということの繰り返しである。リンカーン（そしてエリアーデ）によれば、このようなお互いの犠牲のうちに世界は成り立っているという基本的な観念がこれらの神話を支えているという。

この供儀という行為の中に現れている意味をエリアーデは次のように述べている。供儀の「根本的な観念は生命というものが他の何らかの存在の犠牲によってのみ生まれることができるということである。…すなわち、ある一人の存在に集約された生命がその存在の枠組みからはみ出し、宇宙的、集団的なスケールでその姿を現す」[15]ことであり、言い換えれば、聖なる時間・聖なる空間の再現、始源的な「全体性」への回帰とそこからの創造によって、存在が再び生まれ変わることであるという。このような供儀の神話として知られるものの一つに、ハイヌヴェレ神話があると神話学者イエンゼンの分析をもとにエリアーデは述べる。ハイヌヴェレ神話は、殺害された原初の存在者の身体から有用食物が生じたと伝える食物起源神話である。イエンゼンは最も重要な要素を大きく二つあげる。第一に、人間世界への死の導入、第二に、神的少女の死による有用植物の誕生、である。この二つの要素は、密接に結びつけられ、一つの神話を構築するのである。つまり、有用植物は人間の犠牲によって初めて生まれ、そして、その代償として人間は死を通過し、試されなくてはならなくなった。しかし、それはなぜであろうか。宗教学者チャールズ・ロングは「宗教の解釈学へのプロレゴメナ」において、神話は世界の始源の姿を強調すると同時に、人間と世界との断絶を開示すると述べている。その神話の最も典型としてハイヌヴェレ神話を挙げている。「この神話においてハイヌヴェレの死を導き、実質的に人間の天国的な状況の終わりを導いた妬みについて理解することは困難である」[16]。この「人間存在の本質に関する逆説的な視野は、完全性や全体性へのノスタルジアの表現であると同時に、人間の自律への運動の表現である」[17]。そして、この神話に広がる見方はそういった理想と現実の対立関係を止揚する視野なのであるという。

またフランス人文学者のモルによれば、「『上昇と力とは同義語である（エリアーデ）』と。この高い身長によって表された力の表出が疑いもなく、大きいこと、より多きことを夢見させ、そうなろうとさせる」（モル、九九―一〇〇頁）[18] しかし、「世界の秩序のために」巨人は殺される。この殺害の根拠は、巨人がこの限界を超えた

ものを侵犯するからであるからという。「生きるための社会的条件と個人の条件が成立するために克服されねばならないもの」[19]であるとモルはロングとほぼ同様の解釈をする。（一一六頁）

以上、人間にとって両義的な力をもつゆえに、また人間の自律と完全性へのノスタルジアの折り合いの中から、巨人の殺害が理解されると考えられる。ともかくも、原初巨人のもつ力の分散は、犠牲という行為を通して、世界や人間の誕生を保証するが、それらは同時には存在し得ない。原初巨人の神話において、彼は世界全体に拡散、変化する。

この原初巨人そのものは人間と同一の形の身体というコスモス的な性格をもつ。その点で、人間との共通性を示し、人間―巨人―宇宙の間の対応関係を保証する。一方で、先のオットーの分析にもあるように、人間の理解を超えているという内容をもつ。またバフチーン、ロング、モルらが示すように豊穣的なイメージをも包含する。この豊穣性はコスモスを生む前提である。巨人イメージはコスモスの対極であるカオス的な性格も強い。

巨人イメージは人間と同一であることで人間との連続性を示すと同時に、それを超えた性格を合わせ持つという点においてもロングが解釈するところの「人間の自律と完全性へのノスタルジア」を止揚する視野が見られると言えるだろう。

第三章、イデオロギーとしての身体イメージと宇宙創造神話における成長する身体と宇宙の対応

第三章、第一節、身長や寿命における身体と時代（宇宙・社会）の対応

先のモルの『身長の神話』は大きさと時の関係で興味深い例を示している。

一七一七年、碑銘解読と文芸アカデミーの名誉会員であるアンリオンという人物は人類が生まれた当時のアダムやイブからキリスト到来までの人間の身長の低下をある種の数学的法則を用いて計算できた、そしてキリストの到来がこの低下をくい止めたと主張した。また、ローマ時代のプリニウスらやガリバー旅行記で知られるスウィフトや、モンテーニュの言述に代表されるある種の観念、すなわち、「時とともに人間の身長は低くなる一方だ」という考えが一九世紀まで広く普及していたとモル夫妻は述べている。（モル、六二―六三頁）これは背が低くなってきているという単純な事実ではなく、前節で示したように、大はよく、小はその反対だという基本的観念に結びついているというのである。[20]

以上のモルの議論をまとめるなら、いわば下降的時間観の表現の一つとして、身長・大きさのイメージが用いられている。下降的時間観は、始源の時こそ神や聖なるものに最も近く、それゆえ、最も力強い。そしてその始源から離れることで、時の質的価値は低くなるという考え方である。そして対応という点から見れば、まさしく身長は下降していく時間の各々時に対応していると考えられる。この下降的な時間のあり方が身長（身体）というイメージを通して現

れていると言えよう。

同様な発想は、身長という空間的な側面ばかりではなく、個々人の寿命という時間的な側面においても見られると考える。例えば代表的な例としては旧約聖書があげられるのではないだろうか。キリスト登場までの人物の寿命の減退というものがある。アダムとイブが死を与えられ、以降、寿命はだんだん短くなっていくのである。いわば人間の寿命の長さという量的な特徴は、世界の時々の質的性格として理解されたのである。アダムは九三〇歳、セツは九一二歳、以下、多少の例外はあるものの基本的に後代に行けば行くほど短命になる。世界の下降が人間自身の下降と照らし合われている。

こういった人間の身長・寿命と時代（の質的価値）との対応は神話などにおいてしばしば現れる。今あげた例では下降的な身体・時代の対応であった。次に取り上げる例はその反対、身体・時代の上昇における対応である。[21]

第三章、第二節、イデオロギーとしての身体と宇宙の対応

一九世紀まで下降的な時間、身体観が普及していた。一九世紀はまた身体観、人間観、世界観の大きな流れが変革を向かえる時であった。哲学者コリングウッドはこの時期に力を持つようになる発展史的、進化論的な時の理解の根本に一八世紀の啓蒙主義に基づく、理性中心主義、楽観主義を見ている。[22] 一八世紀以降、啓蒙思想家たちが主張したのは、人類の歴史の発展である。一九世紀の進化論は、この発展史的な視点の延長にある時の理解であり、科学史家の米本昌平はこの進化論が社会ダーヴィニズムとして学問全体に拡大した中でも、その影響を一番に受けた学問として人類学全体をあげている。[23] 例えば「人体測定学」は、様々な人種の身体を次から次へと測定し回り、とりわけ、毛髪、皮膚の色、気性、頭蓋容量、顔面角に注目し、進化の度合いを置いてそれらを並べ分析したが、根本的には自己肯定としての学問的志向性にのみ邁進していったものであるとまとめている。（米本、二六四―二六五頁）一九世紀における科学による寿命の延長を楽観的に喜ぶ姿や、他の人種に対する優位によって、あたかも巨人のような大きな身体をもちえたかのごとき、この自己満足・肯定による自己成型の問題は、それ以外の他者を否定へと直結する点にある。この場合の他者は、同じ社会における子供や女性、特に、植民地的状況におかれた非西欧の人々である。彼ら非西欧の人々は巨人に従属する小人のイメージを（人類学の場合はデータを通して）押しつけられる。象徴ではなく、すでにイデオロギーと化してしまった人間と社会との対応図式を通して、イメージされたのであった。

このイデオロギーに関して優れた指摘をインドの哲学者アシス・ナンディが行っている。彼の論文「子供の再建、大人という概念の批判」の中で、近代における子供という概念は自然的なものではなく、作られたものであるという。そして、重要な点は、それが自らを大人であると定義づけるものからなされたものだという点であると指摘する。いくつかの具体例を示しつつ、それらに共通している図式、すなわち西洋世界＝大人、植民地世界＝子供という対応図式を主張、もしくは前提とする植民地主義の哲学を批判している。[24] このような植民地主義的イデオロギーに対する批判において人間と宇

宙の対応の構造は神話的表現をとらなかったのだろうか？

第三章、第三節、宇宙創造神話における成長する身体と宇宙の対応

その点で興味深く、最後に取り上げるのは、インカリ神話と呼ばれる一連の神話である。これは成長イメージの創造神話パターンの一つである。このパターンの神話は、原初的な巨人の成長が同時に宇宙の創造、かつ成長であるという対応関係がある。同時にエリアーデの「上昇のシンボリズム」が見られるものである。[25]

例えば、次の古代中国の盤古神話の一バージョンはこのパターンを示すものである。

天地混沌として鶏子の如し。盤古其の中に生じ、万八千歳にして、天地開闢す。陽清して天と為り、陰鐸して地と為る。盤古其の中に在りて、神は天に、聖は地に、一日九変す。天日に高さ一丈、地日に厚さ一丈、盤古日に長さ一丈、此くの如くして万八千歳なり。天数高さを極め、地数深さを極め、盤古長さを極む。故に天、地を去ること九万里なり。

（『三五略記』[26]）

この神話はコスモスの静かな誕生を対応の図式で示すものである。巨人の成長は世界の時間、空間的な広がりと対応する。リンカーンらが示す先の原初巨人の神話とはここには犠牲の観念がない点で異なっている。そのため現実と理想のせっぱ詰まった止揚関係は要求されない。そして神話的始源と現在との断絶は強調されず、非断絶感むしろ焦点があてられるのは、宇宙創造はただ一つの出来事ではなくて、むしろ創造の後も息をしたり季節や夜昼の動きなどと対応したりして、現在に続く一つの連続した過程を示すものであるという点なのだろう。[27]

さて、議論をインカリ神話に戻そう。この神話は、ペルーの人類学者ホセ・マリア・アルゲダスを嚆矢に様々な人類学者によって、二〇世紀中頃以降、ペルーの農民から直接、聞き書きされ、そして発表されたものである。[28] インカリとは、スペイン語で王を意味する rey が訛った ri が接尾辞としてインカと結合した語であり、インカ王を意味する。

この神話は数多く採集されている。しかし基本的な共通点がある。[29]

その内容を大まかにあげるならば、昔、スペイン人がこの地方にやってきてインカリは首と胴体を切り放され、殺された。そして胴体（もしくは頭）は地中に埋められ、今、地中で成長している。そして裁きの日には胴体に首は結び付いており、完全な身体に戻っているだろうということである。

この神話はインカの王が殺されたという歴史的事実に基づいている。しかし農民たちの想像力によって今日、採集された形を取るようになったものと加藤隆宏ら人類学者によって分析されている。とりわけ、彼らの重要な指摘は、農民が生きる世界や時代の質的な価値に対する認識と直接関わる点であるという点である。土地が衰え、作物収穫量が少ないこと、政治経済その他を原因とする不自由な生活といった身の回りの具体的な出来事は神話的な原因を措定されている。インカリの首と身体が切り放されたことに直接の原因をもつと農民たちによって語られているからである。

そもそも、身体や、インカ、頭はどのように理解されていたのだ

ろうか？　農民たちの宗教世界は基層となる宗教史を背景にしている。そこから考えてみたい。

アンデス宗教の研究者であるコンスタンス・クラッセンは、インカ帝国時代に、インカがどのように捉えられたかを説明している。クラッセンによると、インカの身体と帝国は対応している。例えば、空間的にはインカは帝国の頂点（頭）であり、中心（心臓）である。また時間的には頭は過去、すなわち始源に関係づけられる。よって頭とは、聖なる中心、それはそこから世界が創造され、三界が通じる点である。[30] つまり時間・空間の両方にわたる、「中心のシンボリズム」がこの頭の意味を構築している。

インカ、インカリの頭が失われているという共通のパターンは、ここから察するに歴史に起源をもつものであると同時にそれは神話化されており、神話的な過去（始源ではなく、ほぼ現在につながる小過去）の喪失体験の表出であるといえよう。そして農民たちの今という時は「中心」を失った状態であることを意味するものである。[31]

しかし、この不完全な身体が完全になる、すなわち頭が再び生まれるということは単なる過去への復帰であろうか？単にスペイン征服以前の過去に戻るだけの営みかと言えばそうではない。人類学者加藤らが主張するように、カトリックの裁きの日のイメージが付随し、また rei というスペイン語が含まれること、などの理由から、その未来は単なる過去の繰り返しではなく、現在の状況と過去の状況の間にある葛藤を乗り越え、より調和的な接合を果たそうとしていると考えるべきものであろう。その意味で、価値的劣等を押しつける他者への批判と同時にそれを凌駕する視点がこの神話を支えているといえるだろう。

この切り放された身体というモティーフは神話論的にはハイヌヴェレ神話同様に、始源の完全性が失われた状況を意味するのだろう。それは身体と宇宙の対応という発想から、宇宙全体（個人、社会、宇宙）の危機的な状況を描いたものであると考えられる。首と身体は離れていない状態でこそ完全である。現在は、小さなカオスとして大きなカオスの中で生長している。この成長は静かなコスモスの創造であり、身体-宇宙の対応から考えると同時に宇宙創造である。いつかはミクロコスモスとして成就し、同時に対応するマクロコスモスが実現するであろうという救済論的な神話である。

むすび

以上、本論では最初に宗教学の視点、象徴と対応の問題を扱った後、対応の問題を具体的に考察するために、宇宙創造神話における原初的存在の巨人イメージと成長のモティーフについての問題を取り上げた。この巨人のイメージは象徴的・両義的な性格を備えていたものである。巨人イメージは人間と同一であることで人間との連続性を示すと同時に、それを超えた性格を合わせ持つという点において「人間の自律と完全性へのノスタルジア」を止揚する視野が見られる。しかし、巨人イメージから宗教性が喪失され、イデオロギー化されることで、そのイメージは、極度に単純化されてしまう。そこでは大きな身体のイメージのもつ力、危険性は見失われている。植民地支配に際して、このような盲目的状況は自己成型における他者の身体性への批判に向けられる。それは被植民地の人間の

身体のみならず、対応図式を用いて被植民地世界そのものへの批判となる。そういったイデオロギーに対する批判の神話としてインカリ神話がある。まず壊れた身体のイメージ、すなわち、壊れた世界という対応を通して、自らの置かれた状況をまず提示し、その解決に対する期待を神話論的に表現している。

ここで身体と宇宙の対応は、マクロコスモスとミクロコスモスの対応という理想的身体＝秩序宇宙を未来に措定した、ミクロなカオスとカオスである世界の対応で示される。インカリのなかで描かれる最初に見出される対応は、ミクロなカオスとマクロなカオスの対応というもので、アルカイックな対応と正反対の内容をみせるものの、過去から未来と続く時間を身体的に捉え、生長の過程を見る。その未来において身体と宇宙の対応はコスモスとしての本来性を回復するのである。

註

（1）宇宙創造神話全体に関しては次の著作を主に参考にした。Long, Charles H., *Alpha, the Myths of Creation*, Scholars Press, Atlanta, 1963.
Long, Charles H., "COSMOGONY", Eliade, Mircea, Editor in chief, *The Encyclopedia of religion*, Macmillan Publishing Company, New York, 1987.
Robin Lovin and Frank E. Reynolds, ed., *Cosmogony and Ethical Order*, University of Chicago Press, Chicago, 1985.

（2）Eliade, *Sacred and Profane*, p. 11.

（3）Eliade, *ibid.*, p. 12.

（4）Otto, Rudolf, *Das Heilige*, Verlag C.H.Beck, Munchen,1936.（ルドルフ・オットー著、山谷省吾訳、『聖なるもの』、岩波書店、一九六八年）

（5）Eliade, *The Sacred and the Profane*, p.165.

（6）Eliade, Mircea, "Methodological Remarks on the Study of Religious Symbolism," Eliade, Mircea, and Kitagawa,Joseph M., editors, *History of Religions, Essays in Methodology*, Chicago, 1959, p. 99.（J・Mキタガワ、H・エリアーデ編岸本英夫監訳『宗教学入門』、東大出版会、一九六二年、一三六頁）

（7）Ibid.

（8）ここではイニシエーションの問題は紙数の都合、扱わない。

（9）Littleton, C. Scott, *The New Comparative Mythology, ThirdEdition,University* of Califolnia Press, Califolnia, 1962, pp. 254-258.

（10）他の構造をもつ巨人伝説などに関して以下を参照のこと。高橋睦郎論、「小子と巨母」、『巨人と小人（季刊、自然と文化一〇）』、日本ナショナルトラスト、一九八五年、四―七頁。郡司正勝論、「伝承された巨人と小人のイマージュ」、同右、日本ナショナルトラスト、一九八五年、二九―三六頁。織田尚久論「巨人・小人伝説の心理学」、同右、三七―四一頁。

（11）ルドルフ・オットー著、山谷省吾訳、『聖なるもの』、岩波書店、一九六八年。

(12) ミハイル・バフチーン著、川端香男里訳、『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』、せりか書房、一九七三年。

(13) Lincoln, Bruce, *Myth, Cosmos, and Society*, Harvard University Press, Boston, 1986, *chap*.1.

(14) 谷口幸夫訳、『エッダ』、新潮社、五六頁、の訳を採用。ところで、エリアーデによれば、原初性には二段階あり、オリジナルな原初性とそれを秩序化するという原初性と分けることが出来るという。前者は水、大地、暗闇などの原初性であり、後者はその段階からのより人間化するものである。この神話は二段階目の原初性を示す。人間の自律性が生まれる様を描く。(Eliade, Cosmogonic Myth and "Sacred History", *The Quest*.)

(15) Eliade, Mircea, *Mith, Dreams, and Mysteries*, New York, 1960, p.184.

(16) Long, Charles H., *Siginifications*, Fortess Press, 1986. p.30.

(17) *Ibid*., p. 31.

(18) カトリーヌ・モンディエ＝コル、ミシェル・コル著、小沼純一、西村薫訳、『身長の神話』、工作舎、一九九四年。

(19) 原初巨人の神話が犠牲や供儀と結びついている。そして宗教史から考察し、それが狩猟採集的な生活を背景にした宗教的観念を因にしたものであると考えるなら、当時の狩猟に基づく社会的状況や倫理を著すものであろうとも解釈できる。これは狩猟民における宗教世界の分析と照合する必要があろう。

(20) モルは「背が高いという美しさは人間の唯一の美しさだ」というモンテーニュの言葉をあげている。一五九頁。

(21) 「時代」という語をマクロコスモスもしくは、メソコスモス（秩序社会）を指すものとして使用している。

(22) コリングウッドの以下の論著を見よ。コリングウッド論、「進歩の哲学」、大野千登志、菊川忠夫編訳、『歴史と進歩』、イザラ書房、一九八五年、九―三六頁。コリングヴッド著、峠尚武、篠木良夫訳、『歴史哲学の本質と目的』、未来社、一九八六年。

(23) 米本昌平論、「社会ダーヴィニズムの実像、欠落した思想史」、村上陽一郎編、『時間と進化（東京大学教養講座四）』、東京大学出版会、一九八一年、二五九―二八八頁。

(24) Nandy, Ashis, *Traditions, Tyranny, and Utopias, Essays in the Politics of Awareness*, Oxford University Press, Dehli, 1992.

(25) cf., Eliade, *Mith, Dreams, and Mysteries*, chp. 5.

(26) Girardot, N. J., *Myth and Meaning in Early Taoism*, University of Califolnia Press, Berkeley and Los Angeles, 1983.

文淵閣、四庫全書中の『太平御覧』巻二引、『三五略記』より。筆者による書き下し。ただし、大林太良著、『稲作の神話』、弘文堂、一九七三年、参照。

(27) 下記を参照のこと。アンナ・サイデル「漢代における老子の神格化について」、吉岡義豊、M・スワミエ編『道教研究』第三冊、豊島書房、一九六八年。

(28) 以下を参照した。ナタン・ワシュテル、小池祐二訳、『敗者の想像力―インディオの見た新世界征服』、岩波書店、一九八四年。アレハンドロ・オルライス・レスカニエレ論、加藤隆浩訳、「アダネバからインカリへ」、大阪外語大学口承文芸研究会『世界口承文芸』五、一九八三年。一七三―二八四ページ。加藤隆宏ら編訳、「インカリ神話資料集」一、二三、大阪外語大学口承文芸研究会『世界口承文芸』五、一九八三年。Sullivan, Lawrence E., *Icanchu's Drum*, Macmillan Publishing Company, New York, 1988, p. 883.

(29) 特に加藤隆宏ら編訳、「インカリ神話資料集」一、二、三には多く掲載されている。

(30) Classen, Constance, *Inca Cosmology and the Human Body*, University of Utah Press, Salt Lake City, 1993, chap., 7-8.

(31) 反対に、同じ地域の神話に登場するパチャママの姿には「中心」の喪失は語られない。Classenによれば、パチャママはグレートマザーであり、その中心はアンデスに置かれ、足、末端はヨーロッパに置かれる。

(くぼた・まさゆき　筑波大学大学院博士課程哲学・思想研究科)